

戦争で狂わされた私の人生

福島県 成田 マツエ

私の本家には、『米沢屋』という屋号がついていたので、明治初年に米沢から移住した帰農士族の安積開墾農家だと考えられる。近所は共に貧乏農家であった。祖父は年老いていたが、家督を相続する男の子はまだ幼少なので、次女のヨシエを小学校にも通わせず農事に使っていたが、骨太く頑健な成女となったので、同じ村内から勘右工門を婿に迎えた。夫婦は勤勉に本家を守りながら、ヨシエは郡山の街に野菜行商をして小金をため、昭和十（一九三五）年不景気のどん底にある中で立派な家を新築して分家したので、世間からは偉いもんだと評判になった。

ヨシエは健康で多産、三男七女を生んだ。四人目の次女として私マツエは大正十三（一九二四）年十一月末に生まれた。貧乏生活にも平気で、男

子に交じって棒を振り回して元気に駆け回って遊んでいたもので、男勝りと言われていた。成女となつてからもときどき反省したが、女として生まれたことを嬉しくもないが否定もしなかった。

ときは戦争時代に入り、長兄栄司は徴兵検査に合格して、昭和十四年五月軍隊へ入隊した。前後して姉チヨは、私共と同じく十人兄弟である立花家の長男と結婚した。義兄は長男なのに突然、国策の満蒙開拓に志願して、ノモンハン事件の最中に大陸に向かって出発した。それに前後して体格が良かった立花の次男も、栄司兄と同じ支那事変に向かつて応召出征したので、佐藤、立花両家は共に戦時環境に包まれた。私の本家の次男明叔父もまた、現役入隊即出征して支那事変に参加、たちまち戦死という慌ただしい中で、私は健康で思春期に入っていたので、女としても多感多情に成長していた。

翌昭和十五年秋、立花の義兄は一時帰国して、姉と姉の長女悦子とそれに妹や弟も連れて、五人

して再び大陸へ渡った。私の父勘右エ門は、「俺も十年若けりゃ行きたいのだが」と勇み立つ思いで姉たちを見送った。それから、母や私も複雑な思いを募らせつつ暮らしていた。そして姉たちから送ってくる現地報告の便りを見ながら、世界が日ごとに切迫する様子を感じてはいたが、昭和十六年十二月八日、遂に日本は米英仏蘭に宣戦布告し、独伊との同盟のもとに全世界戦乱に突入したが、これからどういいう世の中になるのか想像もつかなかった。

緒戦は大戦果に湧いたが、各地の戦況はたちまちにして目まぐるしく変転し、不安を口にすることはできなかつた。昭和十七年三月に長兄が戦地から帰還・除隊すると、早速父は全家族を連れて満州に行くこと決心し、父と長男・次男の三人が団員となつて、姉夫婦のいる三江省筆架山開拓団に向かった。途中、健康そのものであった母が、以外にも乗り物に弱くて酔い、父は十二人を連れての長旅の心配で疲れていたが、私たちは楽しかつ

た。頼りにして行つた姉夫婦たちは第一部落で開拓に従事していたが、先遣隊だけが今年からは個人経営になるのだと張り切っていた。

しかし、大変なことが起こつた。団は計画を急ぎ過ぎて開拓事業に失敗して経理が乱脈となつたが、副団長の悪計で姉夫婦を含む四家族が責任をとらされて追放になつてしまつた。団内は不安となり、皆気が荒れていた。団長は老中尉で厳しかったが、農事指導員の副団長が乱暴な金使いで経理は火の車となつたのだつた。姉夫婦たちは泣きながら団を去つて行つた。私たちは入団一カ月余の変事に驚き、暗い影を負うことになつた。第一部落だけが順調に農耕が進み、第二部落は経営が苦しく、第三部落には私たちより一步早く入植したS一家もいたが、副団長腹心の手下が多いので営農計画はつまづいており、私たちはどうなるのかと心配していたが、一カ月後に義兄の立花が来ての話によれば、追放された二家族は日本に帰り、姉たちの二家族が、佳木斯市と筆架山の中間にあ

る緑ヶ丘という、小さな十戸ほどの満州で最も貧弱な開拓部落に入ることになったが、とても困難な状況だという話だった。

その後、私たちは父勘右エ門が第四部落長となって満人の部落を買収し、二十戸編成で入居した。部落員には副団長の息のかかった元義勇隊から来た青年五人組もあり、気が荒く、義兄立花の従兄弟Yや、元警察官、在満浪人などの転入者など、複雑な人員構成で家族数も多く、生活に不満の声もやかましく、父は部落長として部落の統制運営が困難なことを毎日痛感していた。

そのころ西方筆架山麓の哈達密河ハダミカにダム工事が始まり、また東南方向にある富安炭鉱に向かつて佳木斯市から鉄道工事も開始され、各所で工区が同時に着工したらしく、その賑やかな気分によって、戦況への不安も忘れたようになり、希望を持ち続ける努力をしていた。

昭和十八年は国からの増産督励が急で、我が家では親子三人が団員なので、三戸分三十ヘクター

ルの畑の配分に対して十トン余の供出割当てがあり、私も男性に混じって不慣れな農作業に努力した。雇った満人たちの指導で、珍しくしかも面白い農法を体験した。小さな満州馬を三頭も四頭も引っ張って、男に負けず元気に働き、そのうちに兄たちの作業ぶりがもどかしいとさえ思うようになった。

弟の勇も国民学校を卒業して手伝うようになった。彼は体は小さいが父に似て馬が好きで、兄たちを押しのけて馬使いを習得して父に気に入られた。馬も勇の号令を良く聞き分け、満人たちも感心しながら協力してくれるので仕事も進み、秋には供出割当ても完遂して、先輩部落にも負けぬと褒められた。水田も近くて、三戸分の田から米も余るほどの豊作だったので、母は商才を発揮して醸造した濁酒をダムや鉄道工事場の人たちに売って喜ばれ、一家の財政を潤した。大家族を励まして、肝っ玉母さんらしく父を支え、父も何とか部落長の責任と家業を維持して、団長や満人たちに

も信望されてきた。その後第五部落も建設されたが、資金難で営農は成り立たなかったらしい。私は姉夫婦の緑ヶ丘での生活を心配したが、夫婦は弟と共に頑張って生活しているらしく、私は心の中で平安を祈っていた。

私たちの筆架山開拓団のはるか東方、三道崗と興隆鎮にも同じ福島県出身の青少年義勇隊二個中隊が入植し、同郷の若い男六百人がいると知って、私たち筆架山の娘たちは胸を膨らませ心躍る思いだったが、私も今は姉が結婚したときと同じ年齢となり、団内にいる石城郡出身で同じ第四部落員の上遠野半次に望まれて結婚した。

上遠野は腕自慢の元氣者で、機械操作が好きで団本部の精米所を担当して、農業は満人に任せていた。しかし、一緒になってみたら、気が荒く少々乱暴者であることが分かったので、私も気に掛かっていた。私も気は強いが、家庭を持ってみたら夢に描いていたような甘いものではなかった。私は妊娠して、農産物の供出も、任せた満人との間

柄も、家計のやりくりも順調にかなかった。気ばかり焦る中で、夫は国元の親が病気にかかったので、帰国してしまった。

昭和二十年になると、急に戦争の形勢が悪くなり不安が増してきたが、増産督励は激化して割当でも増加したが、どうしようもなかった。そのうちに日本と同盟を結んでいたイタリアが降伏し、次には同じくドイツも降伏したと聞かされて、日本だけで世界中を相手に戦ってどうなるのかと不安は急に高まり、前途への暗さが増した。チヨ姉さんのちっぼけで貧しい開拓部落はどうなるのか、姉は子供が三人になっていた上に、四人目が妊娠何カ月かになっていたし、また属している緑ヶ丘開拓団とは名ばかりで、戸数も増加せず供出もほとんどしないので、地区が分割されて半分にはキリスト教団が入るといふ始末だった。私は、このままでは緑ヶ丘開拓団は消えて無くなるのではないかと心配していた。父はまた、筆架山の市川団長に願って、チヨ姉の夫の立花を筆架山に戻すこ

などを考えているらしく、何とかそうなつてほしいと私も願っていた。

私の出産も近づき、初めてなので将来のことなどを姉に相談しようと、緑ヶ丘に泊まり込んで女同士でいろいろな話をしていた。そんなとき突然、勇が馬を走らせて来た。勇の話では、筆架山の十何人かに召集令状がきたというのである。特に第四部落では長兄栄司、矢部勘治、長島など義勇隊連中を併せて八人も召集されたとのこと。全員が団のトラックで、今裏山の国道を通るといふ。義兄が急いで国道に出ると、すぐに車が通り義兄もそのまま同乗して佳木斯まで行った。午後には義兄が戻つて来たが、今度は義兄にも召集令状が届けられた。義兄は国民兵役なのに、何の検査もなく令状がくるなんて、さあ大変。勇は今晩は泊まる気でしたのを、早速馬を馳せて我が家へ戻つた。

翌早朝には父が来て見送つた。姉は「これから先、どうしてやつていくか？」と絶望の日々を送つていたので心配になり、私も姉の家にそのまま

泊まっていた。

姉たち夫婦は活気のない緑ヶ丘部落で、劍が峰に立つて夢中になつて働き、三年目には割り当ての三屯余りの供出も完遂し、畜産も始めて生活は安定していたが、義兄が召集されてからは急に生産も落ちて寂しくなつた。

子供三人を抱え、その上妊娠していた姉の心労はいかばかりかと想像に余つた。

そんな状況に同情した私も、できる限り手伝うつもりでいたが、私も妊娠したので、思うような手助けはできなくなつた。

筆架山開拓団では、萩野団医も召集されて団に医者がいなくなつて、病人の手当に大変困つたが、国民学校を卒業して看護婦になるために、佳木斯の病院に寄宿していた妹のチエが、病院の先生が召集されて閉鎖されたので家に戻つており、簡単なことは手伝つていた。周辺の開拓団でも同様で、北隣の第九次宝山山形開拓団も、団員の大量召集で男子がめつきり減り、活気が無くなつたし、北

西の悦来鎮義勇隊や隣接する第九次房子板山形開拓団、その東南にある柳樹河子九次岡山団も、さらにその西のキリスト教団と緑ヶ丘も消滅寸前の形勢になった。

北東方はるかな三道崗と興隆鎮義勇隊も適齡徴兵で半数の人が軍隊に行ったが、そんな中で戦雲は一方的に急を告げていた。

姉の話で、義兄から来た軍事郵便に、「俺は家族が心配だから、いかなることがあっても生きて帰って、お前たちを守る！」と書いてよこしたと言っていた。姉はその手紙を読んで涙を流しながら返事を出したが、それが姉の最後の便りであった。私は姉の家で六月中旬に長女レイ子を生んだが、しばらくして家に戻った。その際に少しでも姉の負担を軽減しようとの思いから、五歳になっていた姉の子悦子を伴ったが、悦子は母や弟を慕って泣き通しだった。

団では人手不足で本務の農作業は進まず、仕方なく共同作業で頑張ったが、思うような成果は得

られなかった。周辺のダム工事や鉄道工事も活気がなくなっていた。

それからも、立花の弟、私の次兄と弟の勇、そして緑ヶ丘、キリスト教団、筆架山団など、あらゆる開拓団と義勇隊に属する十七歳以上四十五歳までの男性は、全員召集された。

八月九日の明け方に、ソ連軍は満ソ国境の各地から一斉に満州国に侵入して来た。同時に、日本人全員には避難命令が出された。暑熱と雨降りとが交互に繰り返される中を、私たちは当座の食糧と家財道具を持って約七十キロメートル先の佳木斯に向かうことになった。

出発準備をしていると、突然に三道崗義勇隊の人たちが来て、「何をぐずぐずしている！ここから奥の富錦方面には、日本人はもうだれもない。筆架山は何をのんびり寝ぼけているのか？」と叫んでいた。たちまち団内は大騒ぎとなった。

団長は会議とかで不在だったが、気がつくとき空にも遠雷のような音が鳴り響いていた。

団長が帰って正式の避難命令が届くと、各部落は俄然浮き足立って騒然となり、第四部落から近い富錦国道は人通りが急増していた。我が家でも召集令状と避難命令とが同時という騒動となり、先を急いで国道に向かった。突然の騒ぎに預かり子の悦子は脅えてしまい、「母ちゃん！ 母ちゃん！」と連呼して泣き続けた。預かった手前、どんなにしても悦子だけは守らなければならないと決心した。

背負った赤子と悦子の手を引いて、私は心を引き締めた。兄嫁のＴちゃんが長男を背負い、両親は妹たち四人を督励して行動した。

私はそのようにしているときでも、姉は今ごろどうしているだろうかと思ひ、それぞれに責任の重さにおののいていた。

国道では、荷物を満載した荷馬車が先を競って走っては、ぬかるみに車輪をとられて転倒していた。お互いに見知らぬ女性同士が血相を変えて、声を荒立ててのしり合っていた。「あなた方、荷

物を欲張ってどうするの？ 命が惜しくないのか！」と言つて、私を見ろとばかりに車上に積んである荷物を捨て、その分疲れた足取りで歩いている人を誰彼なく乗せて、馬を急ぎ立てていた。

団長は書類焼却に手間取って出発が遅れたとか、第五部落は出発準備に手間取って取り残されたとかの騒ぎに、隊列は乱れて伸びてしまい、集団としての形が崩壊していた。

緑ヶ丘の辺りは、もう人影もなかった。昼は暑く、雨が降り始めた夜は小寒く感じられた。大平鎮の門扉には難民が殺到していて、その騒々しい中で第二部落の吉田夫人が馬車上で産気付き、助産婦の那須さんはへその緒を切るのに「缺を持っている人は貸して下さい」と呼びかけていた。その吉田さんは、母子共に健康で無事帰国したと後日聞いた。

砲爆撃の音に追われながら、やっと近づいた佳木斯の街は既に火煙と猛爆撃の音に包まれていた。佳木斯駅から、最後の避難列車に何とか乗ること

ができた。発車と同時に松花江鉄橋が爆破された
と聞き、雨の中を空襲と地上からの襲撃に苦しみ
ながら、ようやく綏化駅に着いた。それからさら
に歩いて飛行場格納庫に向かうが、途中で老人幼
児など弱者の多くが落伍して、捨てられたまま助
けることができなかつた。

收容所で祖国日本の降伏を知った。避難列車に
同乗してきた召集兵も、以前から飛行場にいた他
の部隊の兵隊も、全員が武装解除されてソ連兵に
連行された。連行される兵隊たちの中には、顔見
知りの者も多くいたが、どうしようもなくただ悲
嘆の涙を流すだけだった。

日本軍がいなくなるとすぐに、ソ連兵からの暴
行の恐怖にさらされた。

第五部落の人たちや最終列車に乗り遅れた避難
民は、軍警などと一緒に勃利、依芸方面に逃れて、
山野を彷徨しているうちに、各地で行き倒れを残
した。

さて、万難に耐えて綏化飛行場の格納庫にたど

り着いた私たちは、万余の避難民の中から偶然に
も緑ヶ丘の仲間三十人足らずの人々と出会ったが、
そこで姉チヨの疲れ果てた姿を見出した。ここで、
それまで必死になって私の手に縋り続けていた悦
子を手渡して、私の責任を果たした。再会してお
互いの心が晴れた母子の運命は、それからもさら
に艱難の積み重なるものとなる。私は身軽になつ
たが、姉は相変わらず身重で見るに耐えないほど
のつらさであった。

その後、奉天（瀋陽）辺りで義兄の弟の護や筆
架山開拓団の応召兵の何人かと合流したが、以後
各人のたどった運命には明暗悲喜、紆余曲折なも
のがあり筆舌に尽くせず、また語るにも忍びない
悲惨な出来事もいろいろと起きた。

筆架山の先遣隊長として威張っていた丁は、リ
ュックサックにいっぱいの百円札を持っていたが、
たちまち盗まれてしまい、その後すぐに妻を亡く
し、さらに自分も死んでしまった。また、緑ヶ丘
の中老の男性は孤独に耐えられず自殺した。生き

て再会を喜んだ男たちが、焼酎チャンチュウで祝杯を挙げていて急死した者も何人かいた。さらに同郷の仲間が忘れられないのは、〇〇さんの奥さんだが、せっかくな主人と合流して一安心したのに、収容所で出産直後にソ連兵に犯され、そのショックで死んでしまったのは、だれもが忘れ得ない悲しい事件であり、その後そのご主人もまた、ソ連当局の残兵狩りの手を逃れるため下水道に潜入して、レ・ミゼラブルそっくりの難行をして帰国することができた。そんな悲しい話はいくらでもあった。

それと共に、朝夕に迫ってきた寒気と、まだ残っている日中の暑さとが交々に身と心を苦しめた。私は有り難いことに健康だったので、我が身と比べてだれも彼もが弱々しく哀れで、見るのもつらかった。満人も私たちの持ち物を狙って盗んだり奪ったりし始め、そのうちに誘拐する悪行も始まった。それは、まさに地獄の苦しみというものであった。

そんな窮状を見ながら、日本軍は私たちを守つ

てくれることもなく、毎日ぞろぞろとどこかへ連行されて行き、それを見るのもつらかった。やがて、少しづつだが高粱などの食糧も配給されるようになって、水さえも不足する状態で、寒さが厳しさを加えてくるので、何とかして少しでも南の方へ移動したいと希望していたが、やっと困窮のひどい集団から優先的に南下することとなり、輸送が始まった。

ハルビンを経由して新京（長春）に着き、収穫の終わった馬鈴薯畑で残り芋を探し嚙った。さらに南下を続けて、霜枯れの景色の中を奉天に到着したが、寒さがひどくなって病人が続出し、死者も増えた。収容された春日小学校も既に満員であったが、体を寄せ合って何とか落ち着いた。しかし、どこへ行ってもソ連兵の暴行と満人の泥棒に怯えて、心の安まるときはなかった。一緒に避難していた仲間もだんだんと別れ別れになって、消息が分からなくなっていた。姉も病気になり、その子供の弓子も亡くなった。妹も、発疹チフスや

赤痢でミエ子、和子、トシ子と三人の子供を亡くした。母も父も代わる代わる病気になったし、兄嫁のＴちゃんも長男の幼児を亡くした。団の人も多くが病死して、校庭やプールの中には死体が山積みになされ、凍結していた。その死体を狙って、夜昼となく野犬や狼が集まって来て、食い散らす惨状も目の当たりにした。昨日生きていた人が、今日はあつげなく死んでいた。だれがどうなっても仕方がない状態となっていた。

そんなときに、満人で子供が欲しいと言つて申し込む者や、嫁が欲しいという男が毎日来るようになり、それに従つて子供や若い女性が次々と姿を消していった。それが他人ごとでなくなつて、遂に私たち家族にも及んできた。まず、妹のチエが一番目立ったので、ソ連兵が来ると筆架山の仲間たちが急いで折り重なつて、チエを押し隠して守つてくれた。そのチエに注目していた王少清という大男が毎日来ては、優しく親切にしてくれた。兄嫁のＴちゃんと私も、満人に誘われて馬車で彼

らの家に行き、私は一晩泊まつて帰つたが、Ｔちゃんはそのときを最後に行方不明となつた。団から召集で軍隊に行つた男たちが、十何人も難民集団に合流して戻つて来たが、皆衰弱していて半数ほどの人はだんだんと死んでいった。最も頼りにしていた父も、家族を守る責任の重さに疲れてしまい、だんだんに弱り「もう一度満州でやり直しをしたい！」と口癖のように言っていたが、春日小学校から鉄西区の陸軍官舎に移り、これから何とか少しでも楽な生活をと努力しているうちに、冬を越しきれずに亡くなった。筆架山や緑ヶ丘の仲間も半分以下になつてしまつた。

年を越し、もう春も近いというころに姉とチエが姿を消したが、チエは王少清の家にいることが分かり、多数の家族に親切にされていたようだった。「近く祖国に帰れるとの話もあるのに」と諭したが、「戦争に敗れた今は、米国兵にいじめられるよりはこの国の方が良い」という妹を連れ戻すだけの力はなかった。そしてやつと探し出したチヨ

姉も変わっていた。姉は次女を亡くした後で四人目の子供を出産したが、すぐ死亡してしまい、産後の肥立ちも悪く重傷だった。飢えと寒さに泣く二人の子を養いきれずに、決心の末に長男の薫だけでもせめての生存を願って満人に預けてしまった。そして、その代償として粟などをもらったが、弟の姿が消えたのを直感的に知った上の子の悦子は怯えて母に縋りつき、泣きじやくりながら昼も夜も母の手を握って離さなかった。

春になり、いよいよ帰国の確報を得て勇み立った私たちが姉を訪ねて行き、一緒に日本に帰ろうと誘ったが、姉はもう既に満人家庭の人となっていて、満人に預けてからその所在が分からなくなっている長男の薫を残しては帰れぬと、淋しく首を横に振り応じなかった。仕方なく、私は母と娘と妹の美代と四人で悄然と帰国することになった。

四年ぶりに見る祖国の風景は、美しいとも懐かしいとも思った。敗戦後の惨状を予想して、まともに見ることを恐れていた祖国の姿は、都市部は

なるほど焼け跡がひどかったが、農村部は以前と変わらなかつたので、ほっと安どした。私たちは本家の叔父を頼り、その家に同居させてもらったが、やはり遠慮があった。母はいつものように無口で、手に入れたリヤカーを引いて野菜の行商を始めた。私は乳飲み子を抱えて、肩身の狭い思いで日々を過ごしていた。

前と変わったことは、父母の建てた家はそこにはなくなっていて、村は相変わらず貧しかった。間もなく占領軍の軍政の指示により、地主と財閥が解体された。それに伴って、小作農家が借りていた農地はそのまま安く売り渡されて一応自作農家となり、にわかに活気を呈してきて、復興増産の意欲が盛り上がった。都市部の食糧難とは対照的に、農家は着実に希望に満ちた生活体制に変わっていた。しかし、満州に渡った私たちは間違った夢を見せられていたのだと、冷笑され同情される結果となり、何となく恥ずかしい気持ちとなり惨めだった。

そのようにただ呆然として日を過ごしていた私の所に、私の帰国をどこで知ったのか、それほど懐かしいとも思っていなかったが筆架山で別れたままだった上遠野半次が訪ねて来た。いろいろな話し合った結果、私を連れ出し石城郡入遠野村で再び彼と家庭を持つことになった。半次は村の製材工場で働いていたが、相変わらず力自慢で喧嘩に強く、人を小馬鹿にする癖があり、酒を好み、近所交際は下手であったので、私もなかなか馴染めなかった。すぐに次女セイ子が生まれて、生活は益々苦しくなった。私を案じて訪ねて来た母が、雨が降れば居間で傘をさして雨漏りに耐える狭苦しい借家暮らしの上に、夫の性格は粗暴という惨めな様子を見て、決然として離婚を勧めた。夫は母の気迫に恐れをなし、私も夫には何の愛着もなかったので、母の言うがままに子供を連れて母の許に身を寄せた。そうしている間に、シベリアで「捕虜」になっていた次兄の正と弟の勇が帰国して、正は親戚へ婿入りし、勇は自転車屋へ弟子入

りした。妹美代は農家の手伝いに住み込んでいたが、母は必死になって野菜、闇米、薪炭など何でも手当たり次第という感じで売り歩き、遂には朝鮮人が作った密造酒の販売にまで手を出し、警察からの呼び出しにも忙しいといって出頭しないような剛胆さで、やっていることは「必要悪だ」という考え方で仕事を進めていた。しかし、私は二人の子供を抱えて肩身の狭い思いをしながら、頼る人も無く宙ぶらりんで、不安に満ちて身を持って余っていた。

そのころ、村で鶏や兎を仲買して飲食店に売る成田芳造という男が商売関係で母と知り合い、家にも出入りするようになった。彼は男の子五人も抱えて、女手なしの生活をしていると聞いて、これは私よりもひどい環境だと秘かに同情していた。彼は長身で男ぶりも良く、その上、口八丁手八丁であった。私よりも十五歳も年上であったが、彼は母と私の両方に好意を見せていた。そのうち彼は、年若い私に強く誘いかけてくるようになった。

健康であった私も、そのうちに自然の成り行きで成田の家を訪問するようになった。

訪ねてみると、男六人の家は驚くほど殺風景で乱雑であった。私はたちまち母性本能が刺激されて、意気投合した形で成田の家に飛び込んでしまった。それを知った母は、驚き怒り、激しく反対した。到底無茶な家族の組み合わせであり、他人に説明のつくものではない。私は後先のことも考えず浅知恵で、その上頑迷に突っ走ってしまった。親族の誰彼の意見にも耳を貸さず、満州から避難の修羅場を潜り抜けてきた度胸に賭けて振り向くこともせず、運命に立ち向かった。

私は成田芳造にとって地獄に仏、またその子たちにとっては救いの神とならなければ、と心に誓った。事実、男ばかりの世帯に私たち女三人が加わったのは、荒れ地に彩りと和気が生じ、砂漠にオアシスが湧き出たように、天使となって舞い降りたことになる。理屈ではなく、紛れもない事実だった。しかし、言うまでもなく我が家の生活は

途端に苦しくなったのは当然で、経済的には何日も持たずに破綻してしまうだろうと見られていたし、その覚悟もしていた。だれよりも母が心配したに違いないが、立ち止まって考える暇もない。愚劣でも、まず行動することだと決心した。当時、

夫の子は長男の小学校六年生を頭に四年生、二年生と未就学児二人、私の娘は三歳と零歳、さあ大変だ。突然七人の子の母となった私は、何をしながら夢中で覚えていない。芳造はいつものとおり忙しく出歩き、私は口八丁手八丁でなくても、大声を上げて騒ぎながらきりきり舞い、母の助けも受けたが意地でも泣き言は言えない。村の農家は、着実に増産して食糧事情も好転し、人心も和らいできていたので、物理的に無理をしている我が家の惨状を見かねて、救いの手を差し伸べる人が現れ、私共もその手に縋って、与えて下さった労働をした。子供も年齢に応じてお手伝いや子守りなどをした。子供は親の苦勞を見て育つ。私は、子供が非行に走らないように戒めた。「家貧しくし

て孝子出ず」の教えのとおり、親子の愛情が深くなるにつれ絆も強くなってきた。当時はまだ古い農家の美風も残っていて、我が家の貧しさを知る隣人の温情を有り難く受けた。子供たちも辛い病気もせず育ち、貧しいながらも幸せな毎日であった。

昭和二十五年に三女ヨシ子が生まれた。私が出歩くときは、二児を束にして背負い、両手で二児の手を握り親子五人連れ立って歩く姿は、街の珍しい情景として話題にもなった。続いて昭和二十七年に六男忠一を生むに至り、私が産褥さんじょくにあるときの炊事風景はものすごかった。子供たちが空腹に耐えられず、それぞれに自分の食べる分を調理するのである。杉皮屋根の狭い部屋の炉と竈かまどはもちろんのこと七輪も持ち出し、それでも足りず裏庭に石を並べて作った急造の竈や木の枝に鍋を吊したりして、各人でバタバタと煙を立てて料理を作る様子は、「民の竈は賑わいにけり」と言われた仁徳天皇も喜ばれるような風景であった。夫は、

稼ぐために手当たり次第の仕事を何でもやっている。くず物買いを始めるや、多芸多能と称してちよつと勉強しては、古美術品、小武器、仏像にまで手を広げて博識を誇り、果ては不動産仲介にまで大風呂敷を広げる始末だったが、その割りには収入は少なかつた。夫は口では大きなことを言うくせに、労働して稼ぐことは好まないのが、私にとって悩みの種であった。それに、私は母に似て骨太頑健の多産系でマキ子、ゆり子と七年間に四人も出産したことで、生活は困窮していた。当時、戦後復興の中でベビーブームが起こり、産児制限の声もでていて、妊娠調節、中絶が当たり前のことになってきた。私も例外ではなく中絶流産を幾たびか経験した。無理を重ねて、元来の健康もたびたび損ねて苦痛に悩んだのに対して、夫はさほどに骨も折らず威張るばかりなので、意見の衝突からたびたび派手な夫婦喧嘩になったが、結局は口下手で無口な私が苦勞をいとわずに稼ぐしか手はなかつた。

そうこうしている間に、長男も次男も共に労働で体を鍛えながら成長して、生計を助けるようになった。そして、二人とも早々と結婚し所帯を持ち、塗装屋を始めたのを機に、私も仲間に入って女だてらに塗装現場で働いた。私は熱気の照り返す夏夏も、寒風吹きすさぶ真冬でも、体を張って若者に負けずに稼ぎまくった。

三人仲良く働いたので、貯蓄もできて家も建てた。次女せい子は警察官と結婚し、福島に住むようになった。十一人の子らは、いずれも親に心配をかける者もなく、それぞれに家庭を持ち、孫、曾孫もできた。だれ一人として非行に走る者もなかったことが、何と言っても嬉しかったことだ。夫は一族の頂点に立って、その繁栄を眺め、号令して威張っていた。夫が威張っていられるのも、実は口下手で口数の少ない私が陰で夫を立てて支えてきたからである。家族が貧乏で苦勞をしていたときから、夫は家を空けて出歩き、子供の面倒など一つも見なかった。その分、私が子供たち

ら目を離さず、口やかましく叱り戒めて手綱を握り、病気や怪我から守り続けたのだ。私は先妻の子供も自分の子供も分け隔てなく愛情を注ぎ続けたので、子供は私の心を理解し、私の言うことには従ったのであり、私を中心に十一人の子供らの心は通じ合っており、さらに父を父として立てながら一家を築き上げたのは、実は妻の私であることもよく承知していたのである。もし私が成田と添わなかつたら、成田の家庭はどうなっていたか知れない。成田の先妻はどうなったか私は知らないし、また世間では私を馬鹿女と冷笑したり、悪い女と陰口を言う人もいるかも知れぬし、恐らく私がここまでやるとは思ってもいなかっただろうし、私自身どうなることか大きな不安を抱えていたが、意固地になって貫き通したのは、親譲りの健康と強気の賜と深く感謝している。そして、私は名もない女として一生を終わるが、私の母こそは満州時代の不運を糧にして、引揚げてからは私たちを守って、各人それぞれ立派に自立させて引揚者の

女傑として村に名を残し、国からも招待を受けて、東京の武道館で行われた全国戦没者追悼式典にも参列した。父は、開拓団第四部落長として団の面倒を見て、立派な成績を上げながら家族を育てたし、亡くした八人の家族が生存していたら、私よりも皆立派な働きをしたであろうと、深く惜しまずにはいられない。

私は私なりに幾度も苦難を乗り越えてきたが、激しい重労働の結果得たお金を貯金してきたし、年金も受けられることになり、安心して暮らせるようになった。夫は私の知らぬ才覚でどんなやりくりをしたのか、持ち地に三階建ての家を新築して住んでいたが、都市計画で道路敷地として買収されたので、その代価で隣の山林を買い求めて、山里に移転して悠々と遊んで過ごしていたが、今は三女ヨシ子の家に同居している。現在、九十四歳になるが健康で趣味多く、将棋を指したりしている。

昭和二十六年秋に、中国に残留していた妹チエ

が母によこした手紙で、チヨ姉さんが亡くなったときの様子や、その娘悦子を引き取ったこと、そしてチエ自身もあのと一緒で母と一緒に帰れば良かったと後悔していると書いてあるということを知り、母と一緒に涙を流した。父が最も自慢にしていたときの良い子は、勇とチエであった。昭和五十年にチエが一時里帰りしたときに、祖国日本が意外に良く復興しているのに驚き、もし母と共に帰国していたら、今ごろはだれにも負けずに自分の運命が開けたのにと、あの強気なチエが泣いて口惜しがった姿を見ても、どうしてやることもできなかつた。約一年滞在していて、再び中国へ帰ったチエは、その後出稼ぎだということであつた。そのまゝ居座り、三人の子供と夫の王少清までも次々と後を追って来日したが、あまりに遅過ぎたので生活も思うようにならず、お互いに気まずい場面も起こつた。母も寄る年波で何の援助もしてやれず、心残りのまま世を去つた。

私も母や妹と引揚げたときに、兄嫁のTちゃん

と一緒ではなかった。満人に誘われて、Tちゃんとその家でひと晩泊まったまま行方不明になってしまった。そのことで、Tちゃんの両親兄弟にいろいろと詰問され恨まれて、母と共に気まずい思いをしたが、数多い引揚者の間では、誤解をも交えていろいろな問題が起こった。これは宿命的なことであり、生涯にわたって耐えて暮らさなければならぬと覚悟をしている。

今は何も迷うことはなく、今八十三歳だが、一応の目標は百歳を悠々と笑って迎えようと、無念無想の境地で空を眺めている。最後に、私を生んだくれた母を慕い、そしてその基礎を作ってくれた父に感謝するのみである。

ある大陸二世の記録

千葉県 大和田 義 明

一 両親は朝鮮で家庭を持つ

父朝吉は、福島県箕輪村（現いわき市）の農家の出身で、日露戦争が終わった翌年、仙台の連隊に現役入隊したが、満期除隊を前に憲兵を志願し、なおかつ外地勤務を希望して日韓併合直後の朝鮮へ渡った。

渡航前に、選ばれて仙台で經理の短期講習を受け、また結婚を勧められて、慌ただしく妻帯することとなった。仲人の世話になり、福島県須賀川町の医師、角田午之助の末娘ツキと祝言をあげた。朝鮮で所帯を持った両親は七人の子をもうけたが、私はその末っ子として昭和四（一九二九）年に義州の警察官舎で出生した。私が四歳のころ、父は警察官を退職して、鴨緑江沿いの少し上流にある昌城という町に移り、旅館を経営していたが、下